
白い花

りよく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い花

【Nコード】

N11920

【作者名】

りよく

【あらすじ】

機動戦士ガンダムSEED。

2ndが終わった話。シンキラです。視点は基本シン目線。

戦争終結後、お互いの正体を知らないまま出会う二人。

切ないストーリーです。ハッピーエンドが好きな方はご注意を。

全7話。

(1) はじまり

メサイヤが燃えていく……。

俺が願っていい戦いを終わらす事は叶った……。

けれど、これで本当に世界は平和になるのだろうか？

俺は……そうは思わない。

以前にオーブで思ったことは、今でも俺の中では変わらない。

花が綺麗に咲いても……。

人はまた花を踏みにじる……。

どんなに戦いが終わり、平和になったって言っても所詮それは平和面なだけだ……。

それに……俺の家族が帰ってくることはない。

戦いは一先ず終結を迎えた。俺達も上部同士が結んだ平和同盟で軍も平和の復旧活動へ駆り出されている。

初めはどんな処罰も覚悟の上だったけれど、俺達パイロットには特に大きなお咎めは無かった。その代わりにあれから1か月も経ったがプラントには帰れない。まあ色々と事後処理などがあるからだ。

処遇だって外へ出るときに監視が付くだけで特に困ることはない。

だけど俺にとっては生まれた故郷と言っても家族を殺された場所……こんな場所には居たくない。目を閉じればあの光景が脳裏に浮かぶだけだ……。

「オーブなんて……」

ミネルバは最前線の戦いでだいぶ破損していたことと、武力の解除を示すためにミネルバもプラントには帰れない状態だった。

「シン、今日の分終わった？」

「・・・ルナ、いやまだ機体の方を見に行くから」

「そう、じゃまた後でね」

「・・・ここ注文と違うんだけど」

「えつと・・・ちよつと待って下さい」

整備士のクセにこんなこともすぐに出来ないのかと舌打ちしながら、さっきの整備士が呼んで来たのは深く帽子を被った人物だった。

「ええつと・・・これでどう？」

俺が手渡した変更点を書いた用紙をほんの数分静かに見てから、パソコンのキーをはじき出した。目にも止まらない速度でプログラム変更することが出来るなんて、レイくらいだと思ってたけど・・・。

「平気そうです・・・」

「そう、よかった」

そう言つて帽子を取ると、栗色の少し長めの髪とアメジストの瞳をした綺麗な人だった。最初は女の人かと思つたが、声やしぐさで男の人だとわかる。年齢は自分よりは少し上の様だが、容姿とは違どこか落ち着いた・・・大人な人の様に思えた。

「何かあつたらいつでも言つて下さい」

「あ・・・」

それから何度か見かけることがあつて、俺は何故かその人が気になつていた。

「最近よくここに来てるって聞いたわよ？前はあんなに嫌そうだったのに」

「別に今だって嫌に決まつてるだろ」

確かに以前はどうしても用が無い限りここには近づかなかつたが・・・少し凶星され俺は慌てて出ようとすると・・・。

「シン」

メサイヤが落ちて、全ての戦闘行為が一時終結を迎えた。ミネルバも艦長が死亡し、事実上ザフトの惨敗だった・・・。

戦争が終わって、何度かアークエンジェルのカルーに会うこともあった。けど、俺達を倒した一応敵で・・・オーブの艦隊なわけだから俺が好きになるわけないし、気を許せるわけもない・・・。アークエンジェル内で色々と話とか言わされたけど、俺は一刻も早くここを離れたかった。

「・・・アスラン」

いつもの様にアークエンジェルに来ていた俺は、聞き覚えのある声に足を止める。

「シン、お前と話を・・・」

「・・・俺は話なんてないです」

俺の冷たい答えにアスランは端整な顔を少し悲しげにゆがませる。

「いや、あの後お前達がどうしてるか気になっていた」

「どうしてあんたが俺達の事を・・・気にする必要があるんです？俺達はあんた達に倒されんだ！！」

思わずかっとなって、声を荒げた俺に通りかかった人が怪訝そうに振り向く。

「シン・・・」

「あんたに何が解るっていうんだよ！！」

まだ何かを言おうとしたアスランに思わず手が伸び、殴ろうとしてしまった時・・・。

アスランとは会いたくなかった。意見が違っし、なにより俺達を裏切った奴だ。

その時誰かが止める声が聞こえたと同時に俺が殴って倒れた人を見

て固まっただが、俺に殴られるハズだったアスランはその人物を慌てて覗き込む。

「キラ!!」

「・・・大丈夫だよ」

アスランにキラと呼ばれたのはこの間の人だと気づき俺は焦ったが、キラは赤くなっただ頬をさすりながら慌てることもなく立ち上がる。

「アスラン、喧嘩はダメだよ・・・僕は大丈夫だから」

「だが・・・」

その時緊急呼び出しの音が鳴り、アスランはきちんと救護室に行くよう念押しをしながら慌てて走って行った。

「・・・それじゃ行こっか」

「え？」

「君も怪我してる」

半ば強引に連れられ向かった救護室は人がいなくて・・・

「あ・・・俺します」

先に手早く手当てをされ、俺はお返しじゃないけど・・・殴った張本人だし・・・そうキラに言う素直に椅子に座ってくれた。

「あの・・・大丈夫ですか？」

キラの唇の端は青く少し血が滲んでいた。

「平気だよ」

につこりと微笑まれると顔が赤くなる・・・。

「喧嘩は・・・ダメだよ」

「・・・わかってます・・・」

他の人に言われるのはむかついてイライラするのに、何故かこの人の言う言葉は素直に胸に落ちる。

「あっ」

やっと絆創膏を貼り終えたと思うと、急に声を出したキラに驚いて視線を向ける。

「君、どこかで会ったことあるような気がしてたんだけど・・・前に会ったよね？」

「・・・え？」

「ほら、オーブの海岸沿いで」

その言葉に俺の記憶も蘇って来た、白い花が咲き乱れる場所に彼はいたんだ・・・。

「慰霊碑の所にいた・・・人ってあんただったんだ・・・」

「うん、こんな所で会えるなんてすごいよね」

キラは嬉しそうにそう言ったが俺は複雑な気持ちだった。それがどんな感じかと言われたら説明は出来ないけど・・・なんとなく嬉しくは無かった。

「・・・そうですね・・・それじゃ俺帰ります・・・あの名前、俺はシン・アスカです」

「僕はキラだよ、キラ・ヤマトよろしくね」

それが俺とキラの出会いだった。

>>>Next

(2) チョコレート

「シンってば!!」

「え、何だよ?」

不機嫌そうに覗きこんできたのは同じ赤服のルナマリア。

「この間から上の空じゃない、何かあったの?」

「いや、別に・・・」

一応そう俺は答えたがルナはまだ疑問を持ってるみたいで・・・。

「まだアークエンジェルに通ってるみたいね・・・」

「またそれかよ・・・好きで行ってるわけじゃないって前にも言っただろ?」

一応そう答える。けれど確かにルナの言う通りだ。けど今だってアークエンジェルが好きになったわけじゃない。

今でもオーブは嫌いだ。戦争が終決した少しづつだけ俺のただオーブを憎むだけの感情は変化しているのは事実であっても。

「・・・あ」

今日も用事で地球軍の月基地に俺は来ていた。

地球軍つといても臨戦体制は解かれているから、ピリピリとした緊張感はあまり感じられない。

けどこの戦闘にプラントは負け側だからザフト軍の服を着ていれば嫌でも視線が向く。

イラつく中、俺の視線の先には・・・キラがいた。

あれから何度か偶然会って、何度か話をした。話といっても大した内容でも無くて、ほとんど天気や食事の話とかの話。それでも俺は何故か彼が気になっているのは事実で・・・。

向こうはまだ俺には気づいていなくて、俺は声をかけようか少し戸

惑いながらも近づいていくと彼は誰かといえることに気づいた。

最初はちょうど視界には入らない位置にいたためだろう。キラが誰と一緒にいるのか興味があつて近づくと、その一緒にいる人物を見て俺は立ち止まった。

そこにいたのは・・現オーブの代表である、カガリ・ユラ・アスハ・。

「・・・しかし」

「カガリなら大丈夫だよ、ね？」

内容までは聞き取れなかったが、キラとカガリの関係が親しいことは誰の目から見ても解ることだった・・。

俺はその光景を見て、憎んでいるオーブのアスハとキラが知り合いだと言う事にショックを受けていた。もちろんアークエンジェルがオーブに所属していることは知っている・・。そして次にキラの元に現れた人物にも驚いた・・。

「キラ」

「ラクス・・・どうしたの？」

ピンク色の髪をなびかせ、柔らかな微笑みで2人の下へいくラクス・クライン。

「こちらに用で参りましたら、アスランがあなた方お2人もこちらに来ていると言っていたので・・元気そうだなによりですわ」

「ラクスも元気そうだね」

「はい、そうですわカガリさん、さっそくなのですがお話したいことがあるんです」

「私にか？解った、ではキラ行こう」

「キラには後でアスランと一緒にお話します、先にオーブの代表にお話しなければいけないのです・・」

「そうか・・」

「それではこちらに、キラまた後でお会いしましょうね」

「うん、じゃあ少ししたらアスランと一緒に行くから」

そのキラの言葉にラクスとカガリは笑みで返し3人は別れた。2人がいなくなるとキラは少し瞳を伏せ、前髪をかきあげた。そのしぐさは何というか・・・とても綺麗だと思った。けどその表情は自分が記憶している彼の表情とは違った。どこか辛そうな・・・どこか影のある感じ・・・。

そこにいるのに、どこか違う場所に1人たたずんでいるかのような・・・そんな・・・。

「・・・あれ、シン君？」

その様子を見ていた俺にキラは気づき、さっきの表情は消えていつもの微笑みの表情に戻った。

「・・・あっ・・・どうも」

「またお仕事？大変だね」

「キラさんこそ、忙しんじゃ・・・」

「うーん、戦争が終わってもまだすることはいっぱいあるもんね・・・」

立ち話もなんだからということでキラは自分の部屋へと案内してくれた。

キラの部屋は必要なもの以外何もない、よく言えばすっきり悪く言えば少し寂しい部屋だった。

「ごめんね、何もない部屋で・・・あっこの間ねラクスに美味しいお茶の葉もらったんだ」

そう言つて、キラは楽しそうにお茶をいれてくれた。

「どうぞ」

温かいカップからは湯気がのぼり、果実のさわやかな香りと甘い香りの紅茶だった。

「どうかな？」

「・・・美味しいです」

そう俺が答えるとばあつと表情が明るくなりキラは嬉しそうに微笑んだ。

「あの・・・さつきオーブのアスハとラクスさんと話してましたよね？知り合いなんですか？」

「うん、僕の大切な友人・・・かな、最近は2人も忙しそうで・・・アスランも忙しいみたいだし」

オーブの代表のカガリ、プラントの歌姫ラクス、そしてアスラン・ザラ。誰もが知っているこの3人を友人と呼べるこのキラという人物にシンは少し訝しげに思った。

「アスランとも仲いいんですか・・・？」

「うん、アスランとは小さい頃からの友達で、このトリイをくれたのもアスランなんだ」

『トリイ？』

いつもキラの周りを飛んだり、今は肩の上に止まっているロボット鳥。この鳥をキラはとても大切にしていることは会って短い俺にも感じる事だった。

「・・・あ・・・そう言えば、キラさんはどうしてオーブに？戦争中は何をしてたんですか？」

「・・・僕？・・・」

キラは俺の質問に困った表情を向けたため、俺は聞いてはいけなかったことだと気づいたが・・・。

「オーブは縁って言うのかな・・・戦争中は僕は人を・・・」

「キラ！」

その時部屋に入ってきたのはアスランだった、アスランは俺を見るなり驚いた表情をしたがすぐにいつもの表情に戻る。

「どうしたのアスラン？」

「カガリがお前が来るのが遅いから探して来いっていうから・・・何かあったんじゃないかって思ってた」

「ははは、アスラン心配しすぎだって僕もいつまでも子供じゃないんだから」

「・・・さあ行くぞ、カガリ達が待ってる」

「あつうん・・・アスランすぐ行くから先行ってて」

「え？・・・ああ解った、急げよ」

「何で行かないんだ？皆待ってるんだろ？」

「だって今は君と話をしてるんだし、3人がいれば僕がいなくても話しはまとまるよ・・・それに僕にはもう何も出来ないし」

「え・・・？」

「じゃあ後一杯飲んだら行くことにするから、ね？」

そういいながらもキラはその後30分経ってから俺と別れた。その別れ際・・・。

「シン君これあげる」

「・・・チヨコレート？」

「いつも眉間に皺寄ってるみたいだし、疲れてるんじゃないかなって・・・そのチヨコレート美味しいから食べてみてね」

キラが去った後、俺はあまり甘いものは好きではないけど・・・貰ったチヨコレートを頬張ると、何故かとても美味しく感じた。

>>>Next

(3) 困惑

キラに会ってから俺の頭の中はキラの事が気になってしかたなかった。何故気になるのか自分でも解らないから余計に気になる・・・。こんなのはじめてで・・・。

「お姉ちゃん、こっちこっち」

俺とルナは修理の為預けていた機体を取りに、オーブに来ていた。宇宙でも修理できないわけじゃないのだが、プラントにはまだ事後処理で帰れないし、ミネルバもミネルバ自身が損傷が酷く修理が必要でクルーの多くも傷を負っている為、オーブが機体の修理を行ってくれることになった。

「メイリン、ちよつと待つてって」

メイリンも戦闘中はオーブ側に付く形にはなっていたものの、戦後はプラントに戻れることになっていた。

「修理場はこっち、一応ザフトの機体だから大きな整備場では見付かるとダメだから・・・」

メイリンの案内についていくと、地下におりる長いエレベーターに乗る。エレベーターが着き扉が開くと、俺達の機体は完璧に整備されていた。

「うわあ、少し時間かかったけどあれだけの損傷が全然解らないね」

「・・・でも、プログラム確認してみないと・・・」

「そうね」

俺とルナは自分の機体に取り込みどこか異常がないか確認をした。

「あのーもし問題があれば言ってください」

機体の外から整備士達の声が聞こえる。

「あつここつてどうなってるの?」

ルナがその声の主の声をかけて、何か色々と話している。

「シンの方は異常ない?」

「ああ、俺の方は特に・・・」

「すみません、ちょっと俺には解らないんで・・・えっと」

機体の確認を済ませ機体から降りると、ルナと話していた整備士が一人の青年を連れてきた。

「・・・うん、多分ここじゃないかな?」

青年はすぐにプログラムを見て、次々にすばやい速さでプログラムを変更していく・・・。

「これでどう?」

「・・・うん、大丈夫みたい、ありがとう」

ルナの答えにその青年が振り向くと、それは・・・やっぱり・・・。

「・・・キラさん?」

「シン君?あれこんな所で何してるの?」

「・・・あ・・・機体を修理してもらってたから、取りに・・・」

「機体?」

俺の後ろにある機体を見たキラの表情が変わったことに俺は気づいた。

「・・・これ君の・・・機体?」

「はい・・・そうですけど」

「これに乗ってたのって君だったんだ・・・」

そうポツリと呟いたキラは、悲しい顔をしたままその場を離れてしまう・・・。

「キラさん!!」

「・・・シン君・・・」

「あの・・・あの機体に何か・・・あれはザフト軍所属のディスプレイ・・・」

「知ってる・・・あの機体に乗ってたのが君だったなんて・・・」
キラは悲しい表情なのに、目を俺から背けることはしなかった・・・

「僕達もう会わない方がいいかもしれないね・・・」

「えっ・・・どうして!？」

「僕は・・・きっと君を苦しめるだけの存在だから」

どういう意味か解らなかった、ただキラの言葉を俺は受け入れる事は出来ないだけで・・・

「どういう意味なんだよ!? 何で会わない方がいいなんて言うんだ!?!」

キラは走り出そうとしたが、それよりも早く俺はキラの腕を掴んだ。

「離して・・・」

「何で・・・俺、何かした? 俺が機体乗りだから?」

「・・・シン君が悪いわけじゃないから」

「だったら!!」

「僕が悪いんだ・・・ごめん・・・」

キラはそう言つて、俺の腕を振りほどき走っていつてしまった。

この状況が飲み込めず、俺はキラを追いかけることもできずにその場でしばらく立ち尽くしていた・・・。

「どうということなんだよ・・・」

それから数日が経った・・・特にキラとの連絡方法を知ってるわけもなく・・・お互いの事を・・・いや、俺はキラの事は何ひとつ知らない。キラと会わない数日の間に、俺はプラントに帰れるようになった。

ようやく帰れる事になったのに・・・俺はまだオーブに留まっていた。

「シン、ほんとに帰らないの？」

「ああ・・・」

「何で？あんなにオーブから早くプラントに帰りたいって言ったのに」

「別に帰らないとは言っていないだろ・・・ちょっと用があるから、それが終わったら帰るって」

シンは何度も問われた質問にめんどくさそうに答える。本当なら修理されたミネルバと一緒にパイロットである自分も帰らなくてはいけないのだろうけど、政府は忙しく少し位勝手をしても大したお咎めはないだろう。

「はぁ・・・」

キラと会う日は決まっていたわけでも無いし、約束をしていたわけじゃないけど・・・ここに来れば前までは会うことが出来ていた。だから俺はこの数日毎日オーブの修理工場へ来ているけど・・・キラとはあれ以来会っていない。

「シン」

「・・・ルナ！？何で・・・一緒に帰らなかったのか？」

「うん、シンの事が気になって・・・ね」

「俺のこと？何で？」

ルナ自身も解っている、戦争中は誰かに必要とされていなければ自分の存在、自分の意味、自分の・・・していることが解らなくなつて・・・怖い。だから、シンがステラを亡くし・・・ルナは尊敬していたアスランがいなくなってお互いに穴が開いていた、だから自分達2人は一緒にいることで自分を自分としていることができた。

「何でって・・・そりや同じパイロットのシンが残るなら、私だけ帰っても・・・レイももういないし」

「・・・ルナ、悪いけどルナは次の便で帰って、俺は・・・」

「会いたい人がいる？」

ルナの答えに俺は驚いたが、ルナの方を向いて頷く。

「キラって言う人でしょ？最近よくシンここにいるものね・・・でも、シンはその人が何者か知ってるの？」

その言葉に、ルナはキラの事を少なくとも俺よりは知っているようだった。

「何者かって・・・ルナは知ってるのか？」

「シン、あなたもよく知ってると思う・・・だってあの人は・・・」

『ジリジリジリ！！！！』

その時、大きな警告音が鳴り響いた。

「何だ！？」

『緊急指令、オーブ上空にモビルスーツ！直ちに・・・』

「モビルスーツ！？シン、どうする気？私達の機体はもうここには無いのよ！？」

「別に戦う気は無いけど・・・何が起きているのか知りたい」

「シン！！！？」

俺は近くにあったオーブの機体に強引に乗り込み、モビルスーツが現れたと言う地点に向かった。

>>>Next

(4) 敵(かたき)の正体

「くそっ!!どこにこんな数隠れてたんだ!!?」

デュランダルの意志はまだ残り火の様に人々の心にある。やり方はどうであれ彼にも彼なりの正義があり、共に戦った者たちがいたんだ……。

「何があつたんです?」

「攻めてきたんだ!!あれは……」

最後まで聞いてすぐにキラは顔をあげる。

「数は!??」

「わからねえ……とにかくすごい数なんだ」

警戒音がいたるところで鳴り始め、上層部からの指示が飛ぶ。

けれどあの戦いで多くの機体が破壊、それ以降は平和の意志として新しく作る機体の数は制限。そんな中、動けるものにも限りがある。

「おっおい!!?」

キラは整備士達が止める声を振り切つて隅に幕を掛けられていた機体に取り込むと、空へと舞い上がる。その空ではすでに戦いが始まっていた。

「シン、聞こえてる!? ミネルバで待機だつて命令があつたでしょ!!?」

モニターに映る映像は昔見た覚えのある光景だった……。二度と見たくない……なのに、どうして……。

「シン!!!!?」

ルナの通信を遮断して、俺は現状を把握するために少し距離を置いて眺めていた。

「あの機体……」

確かに一瞬、ほんの小さくだけ見覚えのある機体・・・あれはフリーダム！！

アイツは・・・俺からすべてを奪った奴。

「どうして戦争は終わったんだ！！」

「俺たちの戦いはまだだ！！お前たちオーブに好きなようにさせるわけにはいかない！！共に戦った仲間たちの無念がお前たちに聞こえるか！！？」

その一方的な言葉にカガリとアスランは通信機材の前で息を吐く。

あんな彼らみたいな人間は幾度と見てきた。その結果は2人もわかつている・・・戦うことでしか止められないことを。

「カガリ、俺も出る」

「アスラン・・・だが・・・」

「カガリ様！先ほど情報があつたのですが・・・あの・・・フリーダムが出撃したと・・・報告が」

「何！？パイロットは！？」

「・・・それが・・・」

歯切れの悪い言葉に誰が乗ったかは明白だった・・・カガリがそう気づくと同時にアスランがあわてて部屋を飛び出す。

「キラ！！」

人家の近い場所にいる機体を撃破したあと、取り囲まれ戦闘の中キラはいた。撃破した時などに人家に破片が落ちれば大惨事になるのであるべく海へ落とすようにしていたが・・・。

「少しでも場所を移動しないと」

キラの思いとは別に、フリーダムに気がついた機体が次から次に現れる。あの頃の機体のままなら良かったが、現在は最低限しか装備しておらず・・・このままでは・・・。

その時だった、一瞬反応が遅れたと思うと大きな衝撃があり後方は破損・こちらに向かってくる機体を倒してから警告音が鳴る機体をオーブからは離れた小さな島へと下ろす。

「いた！・・・破損してる・・・！？」

シンはフリーダムを追撃する機体を撃ち落とし、フリーダムを追いかける。

オーブからは離れてはいるが、念のために他の機体の反応が無いかを確かめてから機体を降りる。

破損したフリーダムは森の中の木に紛れるように着陸してはいるが、破損部分が悪かったのだろう動く気配はなく静けさに包まれている。俺はそんな様子を見て、右手に銃を構えたままコックピットのある場所へくる。

パイロットを助ける気なんてないが、俺の家族を奪った奴の顔を見ておきたいという衝動にかられ・コックピットの開閉ボタンを押すと、ゆっくりと扉が開く。扉が開くと同時に濃い血の臭いが鼻をつく。

ブーブと鳴る中、横たわっている人物を見つけ俺は銃をもう一度持ち直しヘルメットに手をかけた・・・そこにいたのは・・・。

「・・・そんな・・・」

「う・・・」

顔に当たる外の光に声を上げる人物は俺が知ってる・・・キラさんだった・・・。

「・・・どうして」

俺の声に、キラがゆつくりと目を開けそばに居るのが俺だと解ったからか一瞬表情が強張ったように思った。

「・・・僕が・・・僕が乗ってたんだ・・・この」

「キラさん!!」

俺はキラの言葉を途中で遮る。キラの言葉を最後まで聞きたくなかったんだ・・・。

ゆつくりとコックピットからキラを降ろし機体からは少し離れた木陰に横たえる。肩と足に深い切り傷があり服を赤く染めてる。手早く応急処置をしてからオーブへ連絡を入れた。

「迎え・・・すぐに来るって・・・」

「・・・そう」

俺たちの間に気まずい沈黙の時間が流れる・・・キラは青白い顔をして黙っていたがポツリと小さくだがはつきり言った。

殺さないの？

視線が俺の右手に注がれていることに気付き慌ててポケットに銃を突っ込む。

「・・・迎え来たから・・・それじゃ」

キラはまだ何か言いたそうだったが、俺はオーブのヘリに見つかる前に機体に取り込む。

頭の中は今までもずっと敵だと思っていた奴がキラだったということではいっばいだった。

>>>Next

(5) 2つの選択

あれから数日。戦闘はアスラン達が出てひとまずは終結をしたがこんな状態で起こることに世界は敏感だ。オーブのアスハや他の幹部たちも連日忙しそうな様子が伺える。

キラについては・・・その後、オーブへ戻り入院しているそうだ・・・。

俺はまだ信じられなかった・・・帰ってきてからルナにも確かめた。フリーダムに乗っていたのは誰かと。答えはやはり・・・思った通りで・・・。

「私もまさかと思ったわ・・・でも、以前アスランから聞いたのは確かに彼だったから・・・」

「・・・そっか」

「シン」

聞き慣れた声にはじかれたように顔を向けるとアスランが立っていた。アスランについて行くと病院で、その一室の前にはアスハやラクスが待っていた。

「俺たちは中には入らないから、お前だけでいけ」

「・・・何で俺・・・」

「キラが・・・話があるそうだ」

キラの名前にドキリとした。一瞬入らずに帰ろうかと思ったがキラの話が気になり・・・一呼吸をしてから部屋に入る。真っ白な病室にベットが一つ、その上にキラが上半身だけ起き上がった状態でカーテンの閉まった窓を眺めていた。ひと時沈黙が流れるがキラゆつくりこちらを振り返り言葉を切りだす。

「ごめんね・・・呼びだしたりなんかして・・・」

「・・・どういづつもりですか？話なんて・・・俺とあなたは・・・」
「ほんとなら家族の敵ならもつと怒りで我を忘れるんだと思った。躊躇なく殺す。あの時みたいにな・・・そう思っていたのに・・・」
「僕はあの機体に乗ってた。僕自身は隠す気はないんだけど・・・政治的にはね・・・だからシン君に選んでもらおうと思って」
「選ぶ？」

「僕を殺す・・・か、君が殺されるか」

「え・・・？」

キラの話す理由には自分は世界の表面上はいない存在として扱われ、存在の秘密を知る人が増えては困ることだった。それを淡々と話すキラはどこか他人事を話すかのようで・・・

「だから君は選ばないといけない・・・」

「俺が選ぶって・・・あなたが選ばば！！」

「だって僕は君の家族の・・・敵なんですよ？」

そう思ってた・・・あの日からずっと彼が敵だって。だけど・・・

「もっと最低な人間だったらよかった・・・どうして！どうしてあなたなんだよ！！？」

「・・・ごめん」

小さく言ったキラの言葉が余計に胸に痛い。どうして・・・どうして・・・選べるわけない・・・そんなの選べるわけないだろ！！」
そのまま病室を飛び出した。呼吸がままならずむせるまで走った・・・

「何で・・・あなたなんだ・・・」

それから何度もキラの言葉が頭に浮かぶ。
冷静になってみればキラの言うことは正しいのかもしれない。あの

戦争でフリーダムの強さを戦いに関わった者なら知らない者はいないだろう。それなのにパイロットの正体を誰も知らないのは、どこかで情報を隠していたのかもしれない。

戦争の勝者側は恨まれることも多いし、たぶん・俺みたいに命を狙っている奴らもたくさんいるかもしれない・。

「・・・けど、それでも・・・選べるわけないよ」

「・・・シン、大丈夫？食事してないって・・・聞いたから・・・あの」

「ほつといてくれ!!」

「・・・シン・・・わかった、けどザフトからの伝言『次の帰還は明日のPM5:00』だそうよ」

「帰還？」

「・・・つらいなら、一緒に・・・帰らない？考えって」

ルナマリアはそう言っ、ザフトから送られてきた帰還通達の用紙を置いて部屋を出ていた。

ここを離れたら、キラとは二度と会うことはないだろう・・・俺はルナマリアの言葉に心が揺らぐ。

眠れないまま俺はいつのまにか朝を迎えていた。どうするか決まってい。けど、取りあえず何かをしていなくちゃ頭の中がぐるぐる回って・・・俺は思いつくままに部屋の私物をかばんに詰める。

もともと自分の持ち物は少ない、唯一この携帯だけは戦いに行くときも持っていたけど・・・。

「シン!!行くぞ!!」

急に入ってきたアスランに俺は何も言えず、押し込まれるまま車に乗せられる。

「ちよっ・・・急に何なんだよ!？」

「キラがいなくなったんだ、お前にも探してほしい」
「え！？いなくなった・・・？」

>>>Next

(6) 繋がる心

昨日の病室には確かにキラの姿が無くて、俺は昨日と同じく慌てて病室を飛び出す。今度はキラを探すために。

つと言つても、キラのことを俺はほとんど知らない。けど・・・何となくあそこにいるような気がして・・・。

キラと以前に会った、慰霊の前。

そこには前と変わらず海の方を見て静かにたたずむキラの姿があった。

「・・・キラさ・・・ん」

俺の声にキラは静かにゆつくりと振り向く。けど、そのまますぐに海の方へ視線を戻してしまう。

「キラさん、病院へ帰りましょう・・・傷、浅く無いはずです」

声をかけてもその場から動こうとしないキラに、腕を掴み軽く引く張る。

「決めたの？どうするか？」

「・・・どちら俺は選べません」

「でも、どうしても選ばなければいけないことはある・・・今もその一つだと僕は思ってる」

「それでも・・・俺は」

「じゃ僕が君を殺すとしても、君は何もしないの？」

キラはナイフを俺に向ける。だけど、殺すと言ってる相手にあなたはどんな顔をしているのか解っているのだろうか・・・。

「・・・俺はまだ死にたくないです、けどあなたも失いたくない・・・

こんな選択は必要じゃないです・・・どうしても言うなら、俺はあなたの傍を離れません」

情報が漏洩しあなたに危険が及ぶなら、俺はあなたの手にかかってもいい。けど俺は・・・。

「・・・君も僕を樂にはしてくれない・・・か」

「え？」

「じゃあ・・・僕が君を殺すよ、僕を殺せないなら」

そう言つて、キラは手に持っていたナイフを持ったまま俺の方へ歩いてくる。俺は抵抗する気は無い。あなたの本心じゃなくても・・・。チクリと心臓とは違う腕の部分に痛みが走ったと思うと同時にキラの手からナイフが落ちる。

「キラ！！」

咳き込みそれを押さえようとした手から赤い血が流れ・・・。
そのまま倒れてしまったキラを抱き上げて病院に戻り、夜中になつてようやくキラは目を開けた。

「僕は死ぬんだ」

俺がいるのを見てキラは静かだが、はつきりそう言つた。

「え？死ぬつて？」

「心臓の病、ずっと前から解つてたんだ・・・もう長くないつて」

「そんな・・・」

「シン君、ごめんね・・・君が気にしなくても僕はすぐに消えるからそれからキラは薬を飲まなくなった。

時折苦しうだけど、俺がいるときはいつも微笑んだ顔だった。心配で片時も離れたく無いのに・・・。

「え！？どうして今！？」

「オーブに来て日も長い、ミネルバの修理はとくに完了している。君たちには本部で色々してもらうことは沢山あるんだよ」

「けど!!」

「シン？」

「ルナ、ちょっと」

「シン・・・本気なの？」

「ああ・・・こんなこと頼んで迷惑だろうけど・・・ルナしか頼めないんだ」

そう言くとルナは一つ大きなため息をした後、以前のさばさばした女の表情になってまかせろつと言ってくれた。

「キラさん、オーブに帰ることになったんだ」

「・・・」

「でも・・・用が終わったらすぐ帰ってくるから」

「うん」

心のどこかではキラが止めるかと思ったが、いつもの様子で頷いただけだった。

「・・・キ」

その時電気が消えて真っ暗になった。

「停電？」

「・・・それかブレーカーが落ちたのかな・・・」

「じゃ俺見てくるよ・・・キラさん？」

「あつ・・・ううん、ブレーカーは一階の階段下だから・・・」

「わかった」

シンが部屋から出ていくと、キラはさつき無意識でシンを掴んでしまった手を握りしめる。

「ダメなのに・・・僕は・・・」

「キラさん、やっぱりブレーカーみたいだったよ」

「そっかありがとう、じゃシン君、明日早いでしょ？僕は一人で大丈夫だから」

その言い方はキラの口癖だった。何があっても大丈夫だって・・・。

「キラさん・・・」

俺はキラにとって重荷かもしれないと思うこともある。

「シン君？」

「キラさん・・・キラと一緒にいたい・・・」

そう言っただけ強く抱き締めると、キラも抱きしめかえしてくれた。だけど、俺が欲しいのはそれじゃない・・・。

「行つてらっしゃい」

「うん・・・」

「どうして！今回の帰還は一週間のはずだろ！？」

「何があつたかは知らないが、それでも言わなければ帰還しなかったのはお前だろう？まだまだ状況が移り変わるなか、あの戦いで前線にいたお前にはしてもらふことは沢山ある」

「クソ！離せ！！」

一週間で戻るって約束したのに！

「キラ・・・」

「キラ、具合はどうだ？」

「カガリ・・・忙しいのに」

ベットから起き上がろうとするとカガリがやんわりと制止する。

「寝たままでいいよ、今日は私が作ったパイを持ってきた」

「カガリが作ったの？」

「私が作つては変か？と言っても私が作れるのはこれだけで・・・母様の得意で父様が好きだったんだ」

「そう・・・」

「あっお茶入れてくるな」

カガリが部屋を出ると、パイを机に置こうと立ち上がると・・・ゴホ・・・ゴホ！。

「キラ！！」

カガリの声が遠くで聞こえたと思うと同時に僕の意識は途切れた。

「カガリ」

「今は落ち着いている」

「キラ・・・」

>>>Next

(7) 白い花

みんなの声が聞こえる・・・どうして悲しそうなんだろう。

僕が・・・いるから・・・？

僕が生きてるから・・・？

閉じ込められてどれ位の時間が経ったんだ？

キラはどうしてるんだ・・・。

「キラ・・・」

「貴方はこんな所で何をしてるんです？」

急に扉が開いたと思うとそこに立っていたのはラクス・クライン。

「キラが呼んでます・・・貴方はどうなんですか？」

「・・・え？」

「貴方はキラに会いたいですか？」

そんなの答えは決まってる。

「会いたい！！」

「アスラン、あとは私が・・・」

ラクスがそう言うその後ろからアスランが現れた。一瞬俺はどう対応していいのか解らなかったが、アスランはいつも通り俺に話しかけた。

「すまない、シンこつちだ！急ぐぞ」

「・・・はい！」

「あの人は・・・キラが選んだ方ですから・・・」
2人の後姿を見ながらラクスは一言呟いた。

「この船はオーブ行きだ、向こうでカガリが待ってる・・・キラを頼む」

「アスラン・・・」

アスランは俺の言葉を聞かずに扉を閉める、俺が言いたいことは解っていると言った表情で・・・。

「キラ!!」

複数の管に繋がれ、浅い呼吸を繰り返すキラがいた。

「キラ! 帰ってきたよ! 約束より・・・遅れちゃったけど・・・」

「・・・シンく・・・ん?」

透き通るほど色白い肌に浅い呼吸のなかキラが薄く目を開ける。

「・・・夢?」

「うつん、ほんとだよ・・・ただいま」

初めて見た・・・キラが涙を流すのを・・・腕に抱きしめたキラが小さく言葉を漏らす。誰にもいえない心に閉じ込めたキラの思い。

「キラ、好きだよ・・・愛してる」

キラからの言葉は無かったけれど、一番の笑顔だった。

それから数日キラは生きた。

アスラン達もキラに会いたいハズなのにほとんどの時間を俺達2人にくれた。

昔話や他愛もない話をしたり、キラがベットから起き上がることができる時は車いすに乗って海岸へ散歩に行ったり・・・それだけで楽しかった。

「ほんとはキラにとって俺の存在は辛いだけなのかって何度も思っ

たよ、死んだ方がいいんじゃないかって・・・」

小さく呟いたハズの独り言はキラに聞こえていたようで、キラは静かに目を開ける。

「最初は君を見ると戦争で殺した人達が責めているようで怖かった・
けど、今は君がいてくれて本当に良かったと思ってる」

「キラ・・・」

「腕・・・傷残ってるでしょ？ごめん」

前にナイフでキラに刺された腕の傷は深くは無かったけれど傷跡が残っていた。

「傷もキラに付けられたと思ったら嬉しいよ・・・ってこれは変か」
以前は触れもしなかった戦争の話しも、こういう風にいつか痛みは残っても話しができればきっとキラの心に光が当たることでもあるはず。

ある月が淡い雲に覆われた少し薄暗い夜、キラの呼吸は今にも止まりそうで・・・このまま眠るように逝ってしまうのかと・・・。俺は涙をこぼさないように窓の方へ視線を向けた時だった。

「キラ！キラ！！見て！！」

キラは重い瞼をゆっくり開いて、俺は窓を指さすと・・・桜が満開に咲いていた。

俺はキラの体を労わりながら車いすに乗せて、屋敷から出て木の傍まで連れて行く。

さっきまで雲で隠されていた月が現れ、月夜に照らされた桜は・・・。

「綺麗だね・・・」

「うん、約束・・・叶った」

「・・・シン」

「ん？」

「好き、ずっと好きだった・・・すごく僕は・・・」

キラの葬儀にはたくさんの人が集まってくれて、誰もがキラの死を悼んでいた。

キラはこんなたくさんの人のために戦ったんだって・・・。

「これからどうするんだ？」

「俺は・・・ザフトに戻るよ。それで一人でも戦う・・・この平和が少しでも、ううん・・・ずっと続くように・・・」

『僕は・・・しあわせだったよ』

「一人でも花を植え続けるよ・・・」

「一人ではないだろ？」

「そうですわ、私達が共に」

「キラもな・・・」

「・・・はい」

たとえ何度枯れても・・・僕は花を植え続ける。

それが俺たちの戦いなのだから・・・。

>
>
>
E
N
D

(7) 白い花(後書き)

「白い花」これで完結です。

ハッピーエンドがりよくは好きですが、たまにこついた切ない感じのストーリーはどうでしょうか？

シンキラ最高ww(笑

感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1192o/>

白い花

2011年1月4日03時21分発行